

新たな文化創造の場をつくる

基本計画の「6 県民の交流による新たな文化の創造と発信」、特に、「6-2人と人との出会いの場」に期待しています。ここに私が思っていることがしっかり書かれています、私なりの表現を加えてみます。

日本に図書館ができた明治期には、本というものがとても貴重で高価で、なかなか庶民の手に届かなかったため、図書館に行けば本を読むことができるということは画期的なことでした。その時代のメディアといえば本でした。一方現代ではネットがあり、膨大な情報に簡単にアクセスできるようになりました。おまけに動画による情報も種々大変な量が供給されています。

図書館の目的とは何なのか。それは人々が(主に知的な)文化的豊かさを享受できるようにすることなのだと思います。その初めはその手段がほとんど本だったのでたまたま「図書館」という名前になったのではないのでしょうか。しかし、その本来の目的から考えれば、その手段を本に限定する必要はありません。紙の本の延長上にある電子ブック、画像、映像、音声などの種々の媒体に広げていくことが当然考えられますが、さらに人と人とのコミュニケーションという手段を取り入れることがより一層重要だと思うのです。マズローの欲求5段階説ではないですが、情報への欲求がかなり満たされるようになった現代では、次の段階として、人と人が直接コミュニケーションすることが求められていると思います。(もちろん、書籍は断片的になりがちなネット情報とは違い、またそれなりのプロセスを踏んで作られているので、その価値を否定するものではありません。)

大学でのキャンパスライフで最も充実したときを与えてくれるのは、多くの場合クラブ(サークル)活動ではないでしょうか。このコロナ禍のリモートで講義を聞くだけの、取り分けまだ仲間をつくることができている新入生の大学生活がいかに味気ないものであるかを見ても、仲間と集うことに大きな意味があることが分かると思います。クラブ活動も中学高校のクラブ活動と大学のクラブ活動は別物で、中学高校のクラブは指導の先生がいて、主導権が先生側にあります。いわば“官製クラブ”みたいなものです。大学のクラブは、同好の士が集まって自分たちで作上げたものです。カルチャーセンターや公民館の文化活動などは“官製クラブ”的な感じがします(もちろんすべてがそうとは限りませんが)。

何を言いたいかというと、人々の中から湧き起こるようなクラブ活動的なコミュニケーションが、或いは指導者がいるとしても「講義」ではなく(それは既にあるので)「ゼミ」のようなコミュニケーションに重きを置く活動が、図書館を舞台に巻き起こらいいなと思います。

世の中にそういった活動をしている人たちもある程度いるのですが、そういう活動を知り得なかった人やそんな活動を自分がすることを思いつかなかった人などが、図書館というポピュラーな施設でそういう活動を目にすることができるようになることで、堰を切ったように広がっていく可能性があるのではないのでしょうか。

社会人になった途端、楽しかったクラブ活動が終わりにってしまうのではなく、社会人も働きながらそういった文化活動をする時代になって欲しいと思います。そしてこれは、現代が抱える「孤独」の問題への一つの処方箋にもなるのではないのでしょうか。

ただ、日本人はシャイです。そんなシャイな人々が参加するきっかけを作るための仕掛けやITを活用した有益と思われるシステム等を提案します。

●まちライブラリー (磯井純充氏が始めたもの)

まちの中にあるカフェやギャラリー、オフィスや住宅、お寺や病院などに本棚を設けて、オーナーやスタッフ、利用者が本を置き、その本をきっかけに交流を生み出すことを意図している。本にはメッセージカードが付いており、そこには「誰が持ってきたか」「なぜ持ってきたか」といった書き込みだけでなく、読んだ人の感想もついている。このメッセージカードがあることによって、一冊の本が「顔が見える本」になり、話のきっかけを生み、交流を促す。他人の本棚を覗き込む感覚に近い、というものです。

●人にも薦めたいと思った古本を勝手に置いていくことができ、勝手に借りられる本棚

自分が読んで人にも薦めなくなった気持ちを形にできる仕掛け
長〜い横一列の超整理法式(野口悠紀雄)本棚(分野別に数列作ってもよい)
新しく持ち込んだ本(一度に数冊まで)や立ち寄った人が興味をもち手に取った本は棚の左端に置くルール
図書館の本とは別扱いで勝手に借りていくことができる。
注目されずにだんだん右に押されて棚右端からあぶれた本は適宜処分される。
出品者が推薦のポップを付けてもいい。自分の本は今どうなっているのかなと関心が向く。

IT環境の構築 → アクセスへのハードルを飛躍的に下げる

●IT検索を学ぶ教室

I Tリテラシーの有無は大きな情報格差につながる。その解消への努力は図書館の責務では。

参加者が教え合う → 仲間ができる

●バーチャル本棚

Google Streetビューのように、360°写真によるバーチャルリアリティによって、パソコンやスマホで図書館の本棚を自由に見て回れ、気になった本をクリックすると概要や目次が出てきて、借りることもできるようにする。

蔵書を一覧表で見ると実際の本棚の背表紙を見るのとでは雲泥の差がある。

●可能なものは全てデジタル化を目指し、ウェブサイトから閲覧できるようにする

地域資料・歴史資料・歴史的公文書・古地図・写真・動画等

●何かを調べると関連資料が示される

Amazonの「この商品をチェックした人はこんな商品もチェックしています」のように、他の人の蓄積された経験を他の人も享受できる。

●投稿・発信システムを用意する

▶県民が情報発信できるプラットフォーム

▶県民が調べてまとめた情報や研究成果等をアップできる。

▶情報を与えられるだけでなく、**県民自らが情報を構築**していく。

▶**本の感想**を書き込める。

▶各自の**おすすめ本**をコメントも付けて投稿できる。

▶発信者になれることで、**モチベーション**が喚起される

●県民がバスマインダーをアップする仕組み

例えば、病気一つとっても、本当に病気になったら自分の病気について突っ込んだ情報が欲しくなる。実際にその病気になった人が得た知識や体験が共有されればとても助けになる。また、実際に起業した人が何を読み、どこに相談に行き、何が参考になったのか。そんな実体験も含めたバスマインダーがどんどん作られ多くの体験・知見またそれに対する反論も含めて蓄積していったら、すごい財産になるのではないか。そして、各人がそこに参加しているという意識を持つることにも意義があると思う。

切実な問題や知りたい事柄、例えば、生きづらさの問題、環境問題、地震、洪水、戦争、縄文時代、戦国時代、明治維新、デザイン、最先端の宇宙理論、哲学、仏教、起業、家庭菜園・・・等々。それらすべてを一部の人間がつくることは不可能で、Wikipediaのように皆でつくるシステムを用意する。活用する側にもリテラシーが求められる。一定の検閲を可能にしてはどうか。

いろいろな問題が発生するかもしれないが、では、ウィキペディアやYouTubeは止めた方がいいのだろうか？北欧の図書館のように、「やってみてダメだったら止める」というチャレンジの仕方もあるのではないか。

●まとめサイト

上記のバスマインダーは、商売や宗教の勧誘などの好ましくない利用のされ方をされる恐れがないとは言いきれず、ウィキペディアやYouTubeのようなシステムを運営するのはパドールが高いかもしれない。その場合には、図書館が様々な項目について選定したお勧めできるサイトや本や情報を整理した「まとめサイト」を作って提供してはどうか。

●統計解読システム

クロス集計等統計データを容易に加工できるシステムを用意し、県民が行政データなどを有意義な形に加工することができ、それらのグラフ等を蓄積し閲覧できるようにする。

▶多くの人が皆のために意欲的に情報整理や研究を始めるようになる。

▶玉石混交となるのでAmazonのようなカスタマーレビューや評価システムも用意する。

●活動の立ち上げシステム

いろんな活動を始めやすくし、また、円滑に運営できるようシステム的にサポート
掲示板やZoom、Slack等の活用

▶プライバシーの保護

●自由に弾けるピアノの設置 (cf.ストリート・ピアノ)・・・ちよつとうるさいか

●演奏スペース

外の広場やプロムナードでは音楽の演奏や練習も基本自由にできるようにする。演奏会とは違い、日常風景の中に流れてくる音楽は、また別の楽しい雰囲気醸し出してくれる。

様々な楽器の練習やプチ演奏披露ができるように、広場やプロムナードに演奏スポットをいくつか作り、日陰やベンチを設ける。

楽器の練習場所に困っている人たちがいるらしい。

●1階ロビーに広い階段

講演をはじめ種々のイベントで観客席や舞台(踊り場)などに活用
閉じた部屋の中でのイベントではなく、開かれた場なら、たまたま目にした人が参加でき、そこから興味が発展する可能性も生まれる。
普段は閲覧席としても活用。

●ファミレスの椅子

いろんな場面に対応できる、いろんな椅子やテーブルが欲しいが、特に、背もたれが高く個室的空間を作りながら、周りにも開かれているファミレスのようなイスとテーブルのセットがグループ活動にはちょうどいいと思う。



感染症対策について

①天井に大量の小型換気扇を設ける

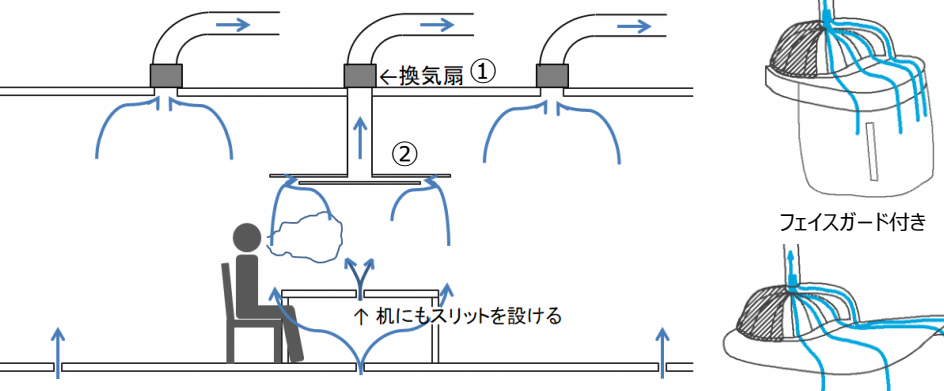
飛行機の機内のように、床(付近)から空気を取り入れ天井に設置した大量の換気扇(例えば座席4つに1個の小型換気扇)により、空気が床から天井に概ね垂直に流れるようにし、屋内の空気の対流が起きないようにする。普段は換気扇の一部を使い、感染症の流行期には、それらをフル稼働させる。空気はフィルターを通して戻すか、外気を取り入れる。

②**テーブルの上にレンジフードのような換気扇を設置**
テーブルと同等の大きさの簡易なレンジフードのような形状のものを設置。普段は高いところにあり、流行期にはテーブルの近くまで下りてくるよう可動式にできないか。吸い込み口を近くして飛沫が拡散する前に吸い込む。

③**換気扇の管の付いた帽子をかぶる(もしくは帽子にファンとフィルターを付ける)**
各自が吐いた息を即座に吸い込む。

④**お掃除ロボットがアルコールで床(テーブルも?)の拭き掃除をする**
テーブルも橋で繋いでお掃除ロボットが移動できるようにし、夜間或いは消毒タイムを設けてロボットでアルコール除菌する。

⑤**抗ウイルス材を使う**
最近出てきている抗ウイルスの壁紙・床材・テーブルなどを使う



上図の床スリット左右2箇所は、床のスリットと天井の吸気口の位置を合わせると、そこ以外の空気が取り残されそうなので、あえて位置をずらしている。